

2021. 9. 19. 主日礼拝説教
聖書： マタイによる福音書 14 章 22～33 節
『助けを求める人は助かる』

現代の社会はストレスの時代といわれて久しくなります。価値観の多様化や人間関係の複雑化による関係の希薄さが人を過剰な被害者意識や不信感の虜へと誘います。その独りよがりな孤独感を埋め合わせようと同じような価値を持つ特定の人としか関わりたくなくなるのです。いわば思い込みの中に籠もってしまうのです。このように、現代とは誰もが自分の好きなように、言いたいことを言い、したいことをして生きてはいけません。心に思うことも言えず、したくないこととして、ずいぶん緊張して生きています。言いたいけど言うべきではない、したくないけどしなければいけない。そのように二つの考えのズレを背負いながら生きている姿をアンビバレンス(両価性)といいます。これがストレスの素です。今日では、小学校の低学年でも死にたいと考えたりしているほどストレスの溜まっている子どもは少なくなく、自分のマイナスの感情を表現することにためらいを感じる風潮があるように感じます。つまり、自分の弱さをさらけ出す相手を見つけられないし、表面上は見つけないということのようです。

人を男女差に分けて考えてはいませんが、社会で働いている(働いてきた)人とそうでない人では、自分が助けを必要としているときに割と平気で SOS を出せるのは後者の方だと言われます。前者の方は変に自分の体裁を意識して自分が助けを必要としていることを表現しにくいのだそうです。例えば、夫婦の一方が病気になって看病をしなければならなくなった時、病身の妻を夫が殺してしまうというケースはその逆のほぼ 100 倍だと言われます。自分は完全で人の助けなんか必要としないし、そうでなければいけないんだと籠もってしまうのではなく、自分の弱さを人に伝え、援助をあおぐことに自由であれば、本人も周りの者もずいぶんストレスから解放されるようです。

ペトロの持つユニークさというものがあります。彼に関する記述はおしなべて、こんなことを言ったら人はどう思うとか、こんなことをしたら人は笑うのではないかという考え方から本当に自由で、自分の感じたことを素直に表現している箇所が随所に見られます。

本日の聖書の箇所でも、ペトロは主イエスに「私に命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」と願います。他の弟子たちはそんなこと言わないんです。ペトロだけが、そんなことは言うべきでないという考え方から自由に生きています。そしたら、主イエスは「来なさい。」と言われます。それに応えてペトロは行動します。そんなこと本気でやったら溺れるなんて考えないわけです。しかし、湖の上でふとイエスから目を離して周りの状況を見、自分がしていることを判断した時、怖ろしさの余り溺れてしまいます。わたしたちも自分の感情に素直に生きているときは感謝したりする余裕をみせますが、別の考えや規範が入ってくるととたんにストレスに繋がるのです。得てして強気な人ほどストレスに脆弱なのです。

しかし、ペトロはそこでもすぐに「主よ、助けてください」と求めます。ペトロに関する記述のすばらしさは、なりふり構わず助けを求めることです。彼の強さは、彼がいつでも誰の前でも自分の弱さをさらけ出して助けを求めることが出来たことではなかったのでしょうか。そこに神の介入があるのです。